

国
語
問
題
用
紙

「一郎さんたちは、国語の授業で【I】の文章を読み、【II】のように感想の交流を行いました。後の(一)～(五)の問いに答えなさい。」

【I】はページごとに上段から下段に続いている。

【I】授業で読んだ文章

バスケットボール部の武井岳と山東涼万と金田晴美（キンタ）、吹奏楽部の井川音心と水野早紀の五人は、緑山中学校一年五組のクラスメイトである。岳を除く四人は、毎朝、合唱コンクールの練習に励んでいる。岳は、以前、晴美に歌が下手だと言って、泣かせてしまったことを気にかけている。次の場面は、膝を痛めてバスケットボール部の朝の練習を見学していた岳が、体育館を抜け出して、合唱の練習の様子を見に来たところである。

首にかけてスポーツタオルを、両手でグツと引つ張った。気づくと、曲が終わっていた。

「今の、とっても良かったと思います。もう一度やりましょう」

指揮者の早紀の声だ。

「待って。ちょっと提案があるんだけど」

今度は音心の声だ。

「五組の合唱、すごく良くなったと思うけど、どのクラスもどんぐりの背比べで、絶対に勝てるってところまでは、いってないと思うんだ」

みんなが少しざわついた。

「だから勝つには、奇策がある。で、提案なんだけど、最初の四小節のAメロって、三回繰り返しがあるよね。その二回目のAメロをソロでやったらどうか」

「えっ、ソロ!？」

今度は一気に騒がしくなった。

「うん。正確に言うとならソロじゃなくてソリかな。ソプラノとアルトのふた

り。たとえば伴奏はこんな感じで、すこし抑えめにして」

そう言うとき音心は、アレレンジしてさらさらとピアノを奏でた。

「おお。なんかいい感じだね」

教室がわいている。

岳は音心の即興演奏に、大きく息を吸い込んだ。きつと音心も涼万みたいな天才肌には違いない。

「なあ井川、それで誰がソリつつーのやんの？」

「うん。このふたりしかないと思っているんだ」

教室の中のちよつとした緊張が、廊下まで伝わってきた。

「水野早紀と金田晴美」

反射的に岳の肩が跳ね上がった。

「えっ!」

晴美の大声が響く。それをスルーして、音心は続けた。

「早紀、ソリの間は指揮をせずに、前を向いて歌うんだ。出来るよね」

いちおう質問形だが、その言葉には有無を言わせない迫力がある。おそらく早紀は、※2気圧けおされてうなずいたのだろう。

「金田もOKだよ。じゃ、早速やってみよう」

ざわついた空気が、すつとおさまった。前奏がまさに始まったとき、晴美が声を上げた。

「ごめん。わたし、やっぱり無理」

音心は演奏を止めた。

「どうして」

「出来ないよ。みんなに迷惑かけちゃう」

① 岳の胃のあたりが、きりきり締めつけられた。

いつも自信たつぷりで、あんなに目立つのが大好きなキンタが……。頼まれたことを引き受けないネガティブなキンタなんて、今まで見たことがない。

晴美の涙顔がまたフラッシュバックした。^{※3}

宝石みたいに綺麗な涙が、玉の汗の中で光っている。

握りつぶされたみたいに、胸がギュッと苦しくなった。

キンタ、やれよ。あの天才井川が、お前がいいって言ってるんだから、だいじょうぶだよ。

祈るような気持ちになった。

「誰か他の人……」

晴美の中途半端なつぶやきに、岳は思わず前のめりになって、音楽室のドアに手をかけた。

出来るよ、キンタがやれよ！

ドアを開けてそう言いそうになったとき、誰かが言葉を放った。

「なあキンタ、まずやってみようぜ。それでダメだったら、また考えればいいじゃん」

しばしの沈黙ののち、晴美の声が続いた。

「……うん」

教室に安堵のどよめきが広がった。

岳はそっとドアから手を離れた。しばらくそのまま、ぼんやりしていた。

音心の前奏が始まり、合唱に入った。

涼万か……。

岳はつま先を見つめた。さっきの声は間違いなく涼万だった。涼万のひとつことが、晴美を勇気づけたのだ。

——はじめはひとり孤独だった

気づくと、音心が提案したソリパートが始まっていた。^② 岳はハツとして顔を起こした。

——ふとした出会いに希望が生まれ

新しい本当のわたし

未来へと歌は響きわたる

音心の抑えめな伴奏にのって、早紀と晴美のふたりの声が重なり合う。

早紀の透き通ったまっすぐなソプラノに、晴美の憂いのあるビブラートの効いたアルト。清らかさと切なさの相反するようなメロディーが混ざりあって、新しい音楽が生まれた。

岳は知らず知らずのうちに、腕に立った鳥肌をさすっていた。

ソリパートが終わると、ほんの少し間を置いて全員での合唱が始まった。いつもとは迫力が違った。

岳は音楽室から離れた。歌が終わってみんなが出てきたとき、こっそりそばで聴いていたことを知られなくなかった。

階段に足を落とすようにゆっくり降りた。だんだんと歌声が遠ざかっていく。やがて曲が終わったのか、大きな歓声と拍手が聞こえた。きつと、ソリパートが大成功して、みんな盛り上がっているのだろう。

バスケの練習をしているわけでもなく、合唱でひとつになりつつあるクラスの一員にもなれていない。

^③ 俺、何やってんだろ。

一階に続く踊り場で立ち止まった。どこかですれたわずかな隙間から、冷たい空気がすうすうと体に入ってくるみたいだった。

(佐藤いつ子「ソノリテイはじまりのうた」による。)

※1 ソリソリの複数形。複数人で旋律などを歌唱・演奏すること。

※2 気圧されて＝全体の感じや相手の勢いに圧倒されて。

※3 フラッシュバック＝過去の強烈な体験が突然脳裏によみがえること。

※4 ビブラート＝音を際立たせるために音声を細かくふるわせる技法。

【Ⅱ】感想の交流の一部

一郎	岳がバスケの朝練を抜け出てきたのは、よっぽど合唱の様子が気になっていたのかな。
花子	それよりも、晴美のことを心配しているから見に来たんだと思うよ。
次郎	そうだね。晴美を傷つけてしまって、岳も相当後悔しているんじゃないかな。
花子	晴美はいつも自信があつて、目立つのが好きだけど、岳のせいで自信をなくしてしまった様子だね。
一郎	そうだけど、岳は自分の行動を後悔しているだけとは思えないんだよね。
次郎	どんなところが？
一郎	晴美の泣き顔を回想している場面があるけど、大切に思っていないかと思つて、 <u>こんな表現はしない</u> と思うよ。それから、晴美を勇気づけている涼万の姿を想像する岳の様子の描写からも、晴美への好意を感じるよね。
花子	なるほどね。結局、晴美は歌うことができてよかったよ。
次郎	「岳はハツとして顔を起こした」 ^② つてあるけど、岳の晴美への思いも含めて、複雑な気持ちを表しているんだね。

(一) 【Ⅰ】に^① 岳の胃のあたりが、きりきり締めつけられたとあるが、その理由として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選んで、その記号を書きなさい。

- ア 自信がない晴美に無理やりソリのパートを押しつけた、音心の勝手な行動に腹が立ったから。
- イ 自分が合唱の練習に参加していないことで、クラスに迷惑をかけているかもしれないと考えたから。
- ウ 晴美がいつもと違って自信がなさそうな様子なのは、自分のせいかもしれないと感じたから。
- エ バasketボールの練習に参加することができない自分は、合唱で役割を果たすべきだと思つたから。

(二) 【Ⅱ】にこんな表現とあるが、その表現を【Ⅰ】から二十四字で抜き出して、その初めと終わりの三字を書きなさい。(句読点を含む。)

(三) 【Ⅰ】と【Ⅱ】に^② 岳はハツとして顔を起こしたとあるが、その理由として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選んで、その記号を書きなさい。

- ア 歌うことをためらっていた晴美が、涼万のアドバイスで歌うことを決心したので、寂しくなつたから。
- イ クラスがまとまったことに安心して、バスケボールの朝の練習に戻れることがうれしかったから。
- ウ 晴美と早紀の見事なソリパートの歌声に聴き入っていて、いつの間にか時が過ぎたことに驚いたから。
- エ 晴美と彼女を勇気づけた涼万のことを考えていたが、思いがけず素晴らしい歌声が聞こえてきたから。

(四) 【I】に^③俺、何やってんだろ とあるが、この時の岳の気持ちとして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選んで、その記号を書きなさい。

ア 他のクラスメイトが合唱の練習に打ち込みながら団結していくのに、バスケットボールの練習にも、合唱の練習にも参加していない自分のことを情けなく思う気持ち。

イ 晴美と早紀がソリパートを大成功させてみんなから歓声と拍手を浴びる中、音楽室の前で、一人で歌声を聞いていることしかできない自分を励まそうとする気持ち。

ウ 晴美の様子が気になって合唱の練習の様子を見に行ったのに、涼万に勇気づけられる晴美の様子を見て、一刻も早く自分も合唱の練習に参加しようと思わせる気持ち。

エ ソリを合唱に取り入れるという奇策を提案した音心に比べると、自分には音楽の才能がないので、バスケットボールでみんなを見返してやろうと発奮する気持ち。

(五) 【I】の内容や表現の説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選んで、その記号を書きなさい。

ア 登場人物の心の中を丁寧に描くことで、気持ちを分かりやすく表現している。

イ 季節の変化を描くことで、登場人物の揺れ動く気持ちを表現している。

ウ 登場人物のユーモアのある言動を描くことで、微妙な人間関係の変化を表現している。

エ 複数の登場人物の内面を詳細に描くことで、人間関係を分かりやすく表現している。

二 一郎さんは、国語の授業で【I】の古典の文章を読みました。後の(一)～(五)の問いに答えなさい。

【I】古典の文章

ある遁世とんせいの上人アしやうにんの、学生がくしやうなるが庵室あんじつへ、修行者しゆぎやう常きたに来る。中なかににある修行者しゆぎやうの云いはく、「法師ウは生まれれてより後、すべて腹を（世を離れた学僧の上人の部屋に）

立て候たてがらはぬ」と云ふを、上人じやうにんの云いはく、「凡夫ぼんぶは、※1貪瞋痴とんじんちの三毒さんどくを具ぐせり。た①とひ浅深せんしん厚薄こうはくこそあれ、いかでか腹立ち（お怒りにならないことはことがありません）

給たまはざらむ。縁えんにあはぬ時こそ立たね、また立つを覚おぼえ給はぬか。※2聖人せいじんにておはしまさば、②さもあるべし。凡夫ぼんぶながらかく宣のたまふ、（怒る機会に出会わなければ腹は立たないが、さもなければ腹は立つもの）

虚事そらごとと覚ゆるなり」と云へば、「立たぬと云はば、立たぬにておはしませかし。人ひとを虚事そらごとの者になし給ふは、（私わたしが怒らないと言うのなら、怒らないとお思いになつておけばよいじゃないですか）

いかにとて候ふぞ」と、顔を赤めて、首をねぢて叱しかりければ、「さては、さこそは」とてやみけり。嗚呼をいがましく侍はんべり。（どのようなお考えか）
（と、けりをつけた） （愚かなやりとりです）

凡夫ぼんぶの習しゆひ、③我が非ひは覚えぬとこそ。無言むごん聖ひじりに似たり。
（人の常として）

※1 貪瞋痴とんじんち＝貪むさぼりと怒りと無知。

※2 聖人せいじん＝知徳ちとくが最も優れ、万人が仰あやぎ崇拜する人。

(一) 上人じやうにん・修行者しゆぎやう・法師ほふし・凡夫ぼんぶ・人ひとの中で、異なる人物を指す言葉を一つ選んで、その記号を書きなさい。

(二) ①た①とひを現代仮名遣げんたいかみなぢいに直して、すべて平仮名で書きなさい。

(三) ^② さもあるべしの内容として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選んで、その記号を書きなさい。

- ア 普通の人の「貪瞋痴」に対して腹を立てても不思議はない。
- イ 生まれてから一度も怒ったことがなくても不思議はない。
- ウ 決して怒らないと人から誤解されていても不思議はない。
- エ 腹を立てたことを全部覚えていたとしても不思議はない。

(四) ^③ 我が非の具体的内容として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選んで、その記号を書きなさい。

- ア 上人について、いつも他人の嫌がる批判をしてしまうこと。
- イ 上人について、結論を出さずに話をうやむやにしまうこと。
- ウ 修行者について、自分の発言と行動が一致していないこと。
- エ 修行者について、他人の助言を安易に行動に移してしまうこと。

(五) 一郎さんは、【Ⅰ】とテーマが似ている話「無言上人の事」を見つけ、【Ⅱ】のように、あらすじと感想をノートにまとめた。しかし、感想を読み返した際に、昔の人の笑いの感覚は、今の人の笑いの感覚に似ているように笑っているの箇所の表現が適切ではないと思い、書き直すことにした。「ことが分かった。」につながるように、
—— 部の言葉を使い、十五字以上、二十字以内で書きなさい。(句読点を含む。)

【Ⅱ】一郎さんのノートの一部

〈無言上人の事〉のあらすじ

四人の上人(僧)が道場内での七日間の無言修行(物を言わずに、精神を統一する修行)を行った。
お手伝いの法師のみが道場への出入りを行った。

道場内の灯火が消えようとしていたので、ある僧が、お手伝いの法師に呼びかけた。

ほかの僧が「無言修行の場で、声を出していいわけがありません。」と言った。

二人の言葉を聞いた僧は、「みなさんは、この場ですべきことを分かっていますか。」と言った。

それを聞いた上の位の老僧が、「私だけは、物を言わない。」と言って、うなずいた。

〈感想〉

- ・ 難しい話だったけど、繰り返し読んだら理解できたので、うれしかった。
- ・ 昔の人の笑いの感覚は、今の人の笑いの感覚に似ているように笑っていることが分かった。
- ・ 興味をもって調べることは大切だと思った。

三 花子さんたちは、国語の授業で、【I】と【II】の文章を読み、グループごとに分かったことをスライドで発表することになりました。そのため【III】の話し合いをして、【IV】のようにまとめました。後の(一)~(七)の問いに答えなさい。

(【I】はページごとに上段から下段に続いている。)

【I】

視点を交換するためのワークをやってもらうと、よく「難しい」という反応が返ってきます。疑うのも難しいですが、まだこれは方法としてはシンプルな方です。単純にいうと、自分が思っていることと反対のことを思い浮かべればいいのですから。再構成も割とできます。論理的思考なので、比較的慣れているのです。

でも、視点を交換するというのは、複雑な作業であるうえに、日ごろやりません。だから難しいのです。まず複雑な作業であるというのは、頭を複数持つということです。正確には複数の思考回路を持つということなのですが。

人間は通常一つの思考回路で物事を考えます。あたかも道の一つ選んでそこをずっと歩いていくかのように。視点を交換ということは、その今歩いている道から急に別の道に移らないといけなくなつた状態です。

そうすると、まずどこから別の道に行けばいいのかわからないでしょう。その前にそもそもどこにどんな別の道があるのか探さなければなりません。これは大変な作業なのです。さらに厄介なのは、その作業を何度か繰り返さなければならぬ点です。

それにしても、なぜ私たちは日ごろ視点を交換しようと思わないのか？もちろん複雑な作業だからやりたくないというのはあるでしょう。でも、

決してそれだけが理由だとは思えません。A、視点を交換するメリットがそれを上回るなら、私たちはなんでもやるはずですよ。人間とはそういう生き物です。

もしかしてそれほどのメリットがない？ いや、そんなことはないでしょう。視点を交換すれば得ることはいっぱいあります。それ以上に怠け者？ それも多少あるかもしれませんが、でも、私の推測はこうです。多くの人がそのメリットに気づいていないのではないかと思うのです。

頑張つて視点を交換すれば、必ずメリットがあるにもかかわらず、そのことに気づいていない。なぜなら、それを教えてくれる学問がないからです。哲学がまさにその学問なのですが、日本では一部の人しか哲学を学びません。しかもその哲学は視点を交換する思考法ではなく、歴史上の哲学者の言葉を分析するものです。

西洋ではもつと多くの人が学んでいます。それもやはり視点を交換する思考法ではなく、歴史上の哲学者の言葉の分析なのです。だからみんな気づかないのも無理ありません。B、皆さんはもう知ってしまったのです。哲学には視点を交換するというプロセスがあること、そしてそれは大きなメリットをもたらすことを。だからやらない手はありません。

哲学のプロセスはいずれもとても大事なのですが、その中でもあえて「一番は？」と尋ねられたら、やはり視点を交換するところを挙げると思います。普段、ある一つの見方しかできていないものを、別の見方をするのはじめて、本質が見えてくるのですから。

いくら疑つても、別の見方ができなければ先には進めません。そのあと、再構成するわけですが、極端な場合には、別の見方をするだけで答えが立ち現れてくることもあるのです。入口がふさがっている時、その入口しか

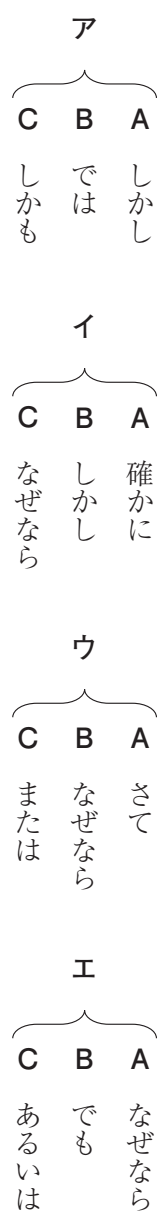
ないと思っていれば先には進めません。そんな時、裏口に気づけば、それだけで問題は解決します。 **C**、扉をよしのぼれることに気づくとか、その扉の下に穴を掘って入るとか……。

だから視点をうまく変えることができれば、どんな問題でも解決の糸口が見つかるはずなのです。私の好きな言葉にカルタゴの名将軍ハンニバルの名言があります。あつと驚く戦術で勝ち続けてきた将軍です。それは、「視点を変えれば不可能が可能になる」というものです。

私にとっては、この言葉自体がすでに一つの新たな視点でした。つまり、視点をただ変えるだけで不可能が可能になるという視点を手に入れたのです。それ以来、問題にぶちあたるとき、そういう視点で問題に向き合うようにしています。絶対に解決できると。

その方法として、色んな視点でとらえるようにしています。究極は神様でしょう。神様には全部見えているはずですから。これは神を信じるかどうかとは別に、あらゆる物事を知りうる存在があるとして、それを神と呼ぶならばという話です。私は常にそんな神様を想像して、神様ならどう見えているかと考えるのです。すると無数の視点が浮かび上がってきます。

(一) **【I】**の **A**、 **C** に入る言葉の組み合わせとして最も適切なものを、次の **A**～**E**の中から一つ選んで、その記号を書きなさい。



ただ、この域に一気に達することができないわけではありません。私も長い時間をかけて、色んな視点で物事を見る経験を積み重ねたことで、そうした視点のストックができ、神様の想像ができるようになりました。

逆にいうと、そういう経験を積み重ねれば誰だって神様レベルに近づくことはできるといえることです。神様レベルと違って、なんだか子どものようなことをいつているように聞こえるかもしれませんが、実はこれは近代ドイツの偉大な哲学者ヘーゲルがいつていたことなのです。

彼は絶対知という言葉を使ったのですが、これは人間の意識が様々な経験を経ること、神様のような知に達することができるということです。絶対という言葉からもわかるとは思いますが。その場合の経験というのは、様々な視点でものを見る経験だといっていると思うのです。

(小川仁志「中高生のための哲学入門―「大人」になる君へ―」による。)

※1 ワーク・ワークショップのこと。進行役や講師を迎えて行う体験型講座。
 ※2 カルタゴはアフリカ北部にあった古代の都市。

(二) 【I】の内容に合っているものとして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選んで、その記号を書きなさい。

ア 視点を変える最大のメリットは、不可能を可能にするという視点を確実に手に入れることであり、歴史上の哲学者の言葉を分析することによって、私たちは視点を換えることができる。

イ 視点を換えることは繰り返しを必要とする作業であるが、多くの視点で物事を捉える経験を積み重ねることによって、どんな問題でも解決の糸口を見つけることができるはずである。

ウ 視点を換えることは一般的には敬遠されがちだが、西洋では、哲学を通して視点を換える思考法を多くの人が学ぶことによって、問題を解決するための論理的思考力を高めている。

エ ヘーゲルは、人間がさまざまな経験を重ねることで、その人自身の中に無数の視点が浮かび上がってくると言っており、そのことで、私たちは神様レベルに一気に達することができる。

(三) 花子さんは【I】を読んで、「視点を換えよう」としない理由」を次のようにまとめた。 D に入る最も適切な言葉を、【I】から十二字で抜き出して書きなさい。

○ 視点を換えよう」としない理由

D

}

- ・複雑な作業
- ・人間は怠け者

昔、江州（こゝろ）の商人と他国の商人が、二人で一緒に碓氷（うすい）の峠道を登っていた。焼けつくような暑さの中、重い商品を山ほど背負って険しい坂を登っていくのは、本当に苦しいことだった。

途中、木陰に荷物を下ろして休んでいると、他国の商人が汗を拭きながら嘆いた。「本当にこの山がもう少し低いといいんですがね。世渡りの稼業に楽なことはございません。だけど、こうも険しい坂を登るんでは、いつそ行商をやめて、帰ってしまいたくなりますよ」

これを聞いた江州の商人はにっこりと笑って、こう言った。

「同じ坂を、同じくらい荷物を背負って登るんです。あなたがつらいのも、私がつらいのも同じことです。このとおり、息もはずめば、汗も流れます。だけど、私はこの碓氷の山が、もともともと、いや十倍も高くなってくれば有難いと思います。そうすれば、たいていの商人はみな、途中で帰るでしょう。そのときこそ私は一人で山の彼方へ行つて、思うさま商売してみたいと思います。碓氷の山がまだまだ高くないのが、私には残念ですよ」

どんな仕事にも、その仕事特有の苦労がある。

二人の商人の苦労は、普通の人ならば体一つで登るだけでも大変な山道を、重い荷物を担いで運ぶことである。誰でもできる仕事ではあるまい。筋力や体力はもちろんのこと、忍耐力も必要だろう。仕事特有の苦労は、ある種の参入障壁になる。つまり、その仕事に新たに就きたいと思う人を

思いとどまらせるのだ。

世の中には、「手間ひまがかかってめんどくさいわりにはお金が儲からない」という仕事は多い。確かに、それはその仕事のデメリットである。しかし、それは同時に参入障壁にもなっている。

先日、「プロフェッショナル 仕事の流儀」宮崎駿スペシャル（みやざきはやお）〈風立ちぬ 一〇〇〇日の記録〉という番組の再放送を見た。この中で、宮崎が何度も発する言葉に私は衝撃を受けた。それは「めんどくさい」という言葉だ。「え、宮崎駿でも、めんどくさいって思うんだ」。私は驚いた。私は、宮崎駿レベルのクリエイターであれば、めんどくさいとは無縁だと思っていた。しかし、違っていた。

「めんどくさいって自分の気持ちとの戦いなんだよ」「大事なものは、たいていめんどくさい」「めんどくさくないとここで生きてると、めんどくさいのはうらやましいなと思うんです」。めんどくさいの連発である。

私は思った。みんな多かれ少なかれ「めんどくさい」という気持ちと戦いながら仕事をしている。「めんどくさいが仕事のやりがいを生んでいる」と考えてはどうだろうか。

（戸田智弘「もの見方が変わる 座右の寓話」による。）

※1 江州＝近江国（現在の滋賀県）の別称。

※2 碓氷＝群馬県西部の地名。

※3 参入障壁＝参加することのさまたげとなるもの。

【Ⅲ】グループでの話し合いの一部

花子	【Ⅰ】では、「視点を変える」ことの大切さが強調されていましたね。
一郎	【Ⅱ】は、その具体例として読むことができますね。
花子	【Ⅰ】と【Ⅱ】の内容をうまく組み合わせ、発表のスライドの構成を考えていきましょう。
一郎	【Ⅰ】では、「視点を変える難しさ」が最初に述べられています。それを一番目のスライドにするのはどうでしょうか。
明子	でも、難しさを最初にする、聞いているみんなは取り組もうとする気持ちがなくなってしまうのではないのでしょうか。
次郎	それなら「視点を変える良い点」を一番目のスライドにすればいいですね。その次に「難しさ」を出してはどうでしょうか。
一郎	そうですね。やはり僕も「良い点」から聞きたいです。最初は筆者が言うように「難しさ」を述べた方がいいかと思いますが。
花子	では「良い点」を先に述べて、その後で「難しさ」を述べていく順番にしましょう。
明子	そうですね。でも一番最初に宮崎駿さんを出すのが効果的ではないでしょうか。「めんどくさいのはうらやましいな」というセリフが興味を引くと思います。
次郎	なるほど。そうすると聞いているみんなに、なぜこの発言なのか、という疑問を抱かせて、興味を引くことができそうですね。
一郎	「めんどくさい」は否定的な気持ちですが、【Ⅱ】の中で筆者は、そのことが E のだと肯定的にとらえていますね。
明子	それでは二番目に次郎さんの言っていたように「良い点」をもってきて、その具体例として、【Ⅱ】の商人の視点の違いを入れましょう。
次郎	いいですね。【Ⅰ】の結論として、さまざま視点で物を見る経験が大切だと述べているので、視点を変える経験の積み重ねを一番最後にもつてくると、私たちの伝えたいことがはっきりしますね。
花子	ありがとうございます。発表するのが楽しみです。

【Ⅲ】の **E** に入る言葉を、【Ⅱ】から十三字で抜き出して書きなさい。

【Ⅴ】の——部の花子さんの発言は、話し合いの中でどのような役割を果たしているか。最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選んで、その記号を書きなさい。

- ア 話し合いの内容を整理する役割
- イ 相手の発言の根拠を確認する役割
- ウ 相手に話題の転換を促す役割
- エ 話し合いの目的を意識させる役割

ア

- 視点を変える経験の積み重ね
ヘーゲル 絶対知
 さまざまな視点でものを見る

イ

- 視点を変える難しさ
複数の思考回路をもつ
 大変な作業の繰り返し

ウ

- 視点を変える良い点
ハンニバル
 不可能が可能になる

エ

- 商人の視点の違い

同じ事実	商人	事実に対する違う意見
碓氷の峠 道を登る こと	江州	山が F とよい
	他国	山が G とよい

オ

- 宮崎 駿の視点

めんどくさいのは
うらやましいな

「めんどくさい」の連発はなぜ？

- (六) 【Ⅳ】のスライドは、【Ⅲ】の話し合いをもとに作成したものである。発表の順番になるように、ア～オの記号を並び替えて書きなさい。
- (七) 【Ⅳ】の F と G に入る言葉を、【Ⅱ】をもとに考え、それぞれ二字で書きなさい。

四 次の(一)～(三)の問いに答えなさい。

(一) 次の【I】～【III】を読んで、後の(1)と(2)の問いに答えなさい。

【I】書き下し文

孔子曰く、薬酒は口に苦きも、病に利あり。
□、行ひに利あり。

【II】訓読文(訓読するための文)

孔子曰、薬酒苦於口、而利於病。忠言逆於耳、而利於行。

【III】現代語訳

孔子がこう言った、「薬酒は口に苦いが、病気には効き目がある。真心から出た言葉は耳に痛い、行いには助けとなる。」

(1) 【I】の□に入る語句として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選んで、その記号を書きなさい。

- ア 耳に逆ふも忠言は イ 忠言は逆ふも耳に ウ 忠言は耳に逆ふも エ 耳に忠言は逆ふも

(2) 【I】の——部「利」のへんを行書で書いたものとして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選んで、その記号を書きなさい。

ア 𠄎 イ 𠄏 ウ 𠄐 エ 𠄑

(二) 次の(1)～(4)の——部について、漢字の部分の読みを平仮名で、片仮名部分を漢字で書きなさい。

- (1) 寸暇をさいて勉強する。
(2) 破れた衣服を繕う。
(3) 苦勞がムクわれる。
(4) 人口のゾウゲンが目立つ。

(三) 「握手」という熟語の構成の説明として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選んで、その記号を書きなさい。

ア 二字が似た意味の漢字を重ねたもの。

イ 二字が対になる漢字を組み合わせたもの。

ウ 上の漢字が下の漢字を修飾しているもの。

エ 下の漢字が上の漢字の目的や対象を示すもの。

オ 主語と述語の関係にあるもの。

		四					三					二					一					問題																	
(三)	(二)				(一)		(七)	(六)	(五)	(四)	(三)	(二)	(一)	(五)		(四)	(三)	(二)	(一)	(五)	(四)	(三)	(二)	(一)	標準解答	配点													
エ	(4) 増減	(3) 報（われる）	(2) つくる（う）	(1) すんか	(2) イ	(1) ウ	F	オ	ア	メ	イ	エ	ことが分かった。	昔の人と、今の人の笑いの感覚は似ている	ウ	イ	たとい	ア	ア	ア	ア	ア	エ	ウ			初め	5点	5点	5点	5点	5点	5点	6点	5点				
							高い	↓		仕事															ツ	終わり	いる									6点	5点	5点	5点
							G	ウ		の															ト		いる。	5点	5点	5点	5点	5点	6点	5点	5点				
							低い	↓		やり															に	。○	5点									5点	5点	5点	5点
								↓		が															気づ				5点	5点	5点	5点	5点	6点	5点				
										い															いて		5点									5点	5点	5点	5点
																									を				5点	5点	5点	5点	5点	6点	5点				
				生		5点	5点	5点	5点	5点	6点	5点			5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点									5点	5点	5点	5点
				んで																									5点	5点	5点	5点	5点	6点	5点				
				いる		5点	5点	5点	5点	5点	6点	5点			5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点									5点	5点	5点	5点
																													5点	5点	5点	5点	5点	6点	5点				
						5点	5点	5点	5点	5点	6点	5点			5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点									5点	5点	5点	5点
	3点	2点	2点	2点																								2点	3点	3点	5点	7点	4点	4点	4点				
	17点							33点							24点					26点																			

（注意）
この標準解答及び採点上の留意点によって処理しがたい細部については、各学校で適正な基準を設ける。

		三	二	一	問題
(七)(六)(四)(三)		(五)	(二)	(一)	採点上の留意点
完全正答		(3)	(2)	(1)	
		(3) あっても2点減点。 誤字・脱字については、いくつ表記について部分点は与えない。	(2) 同意文で、「ことが分かった。」に適切に続くように書いてあるものは可とする。	(1) 要件について十五字以上、二十字以内で書いていないものは誤答とする。 内容について	